

## エピソード23

保護者が連絡帳に何も  
書いてきません。



なみちゃん

小学校教師として25年以上の経験  
があります。エデュサポネットのファ  
シリテーターです。



小学校で、特別支援学級の担任をしていたときの経験をお聞きします。

通常学級を希望しているそういちくんが、入学前に学校を見学したいと来校しました。

保護者と一緒に来校したそういちくんは、じっとしていることが苦手らしく、落ち着きなく動き回り、質問にも答えてくれることはありませんでした。





保護者の様子はどうでしたか。

そんな姿を見て、そういちくんの保護者は、特別支援学級への在籍変更を決心しました。そして、僕が担任することになりました。

「これから一緒にがんばりましょう」とお話しし、入学してからは、そういちくんの様子を連絡帳でお母さんにお伝えしました。





保護者からの連絡はありましたか。

お母さんからは何の反応もなく、  
2か月くらいそんな様子が続きました。

そして、やっと事務連絡みたいな内容を  
ぽつぽつと書いてくれるようになりました。





その後、どんなことがありましたか。

一年ほど経って、そういちくんの家に  
家庭訪問をした時のことです。

お母さんが「そういちが入学してから、  
私は、何にもやる気がなくなって  
いたんです」と話してくれました。





そのお母さんの言葉から、  
先生は何を感じましたか。

お母さんが、そういちくんと向き合うことが  
辛くなっていたのではないかと思いました。

入学するまで、ご両親は、通常学級に  
行ってほしいとか、特別支援学級は嫌だ  
とか、いろいろな思いの中で子育てを  
頑張ってこられたのだと思います。





お母さんは、他にもお話しされましたか。

お母さんは「学校見学の時のそういうあの姿や状態を見たとき、もうこれ以上自分は頑張れないという気持ちになってしまった。

そして、すべてをあきらめて特別支援学級に入れたのです」と話してくれました。





お母さんは、他にもお話されましたか。  
先生はどうしたのですか。

お母さんは「だから連絡帳に、こんなことができるようになったとか、今日は元気でしたとか、書いてもらっても、どうでもよかったんです」と話してくれました。

僕は、お母さんの辛さに気づけず申し訳なかったと思いました。そして「話してくれてありがとうございました」と伝えました。





その後のことを聞かせてください。

その時のお母さんの様子から、やっと  
そういちくんを受け止めることができた。  
ここから頑張るんだ、落ち込んでいられ  
ない、という思いが伝わってきました。

僕もお母さんと同じ歩幅で、そういちくん  
を見守っていこうと思いました。





## なみちゃんの一言

- ・保護者が、我が子の発達の躓きを受け入れるためには時間が必要です。自分の子育てを責めたり、子どもと向き合うことが辛くなってしまうこともあるのですね。
- ・そんな保護者には、寄り添って話を聴いてくれる存在はとても大切です。教師がそんな存在になればいいですね。

お・し・ま・い



なみちゃん

ナレーション 浪岡美保  
(北海道教育大学大学院 修了生)

イラスト 尾上樹里  
(北海道教育大学 大学院生)